

焼き物ってなあに?

「焼き物」と聞いて、お膳に並んだ魚や肉などのあぶり焼きを思い浮かべる人、おられますか。残念ながら今回は、土を捏ねて焼いた焼き物の特集です。近江の焼き物の歴史や、現在活躍中の陶芸作家、だれでも参加できる陶芸教室などを紹介しましょう。

一般に「陶磁器」と、陶器と磁器をひとまとめにいうことが多い。陶器と磁器の違いは？

と、まず原料が異なる。陶器は粘土を原料とするが、磁器は「石物」といわれるように、陶石という石を粉末状に砕いたものを原料にし、陶器よりも高温で焼かれる。深窓の令嬢風きめ細かな白いお肌が磁器で、農村のお母さん風素朴な肌合いは陶器という、見た目の違いによるおおかまな見分け方もあるが、これは間違つてごめんなさい、ということもあつたのでご注意。日本で磁器の生産が始まったのは江戸時代に入つてからのこと。朝鮮半島からの渡来人によつて技術が伝えられ、佐賀県有田町における有田焼(伊万里港から出荷したので伊万里焼ともいう)を中心として盛んになった。江戸後期には技術が伝播し、京焼や九谷焼が始まる。

焼き物の代名詞になつたという。では、陶器はどんな粘土でも作れるのだろうか。陶器、磁器を問わず、焼き物には長石、珪石、カオリンという成分が不可欠だ。長石は高温で溶け、ほかの成分をくつつける、珪石の少ない焼き物は壊れやすい、カオリンは形をつくるのに役立つなど、それぞれの役割があり、その純度によつて作品のできあがりも変わってくるわけだ。

湖底から見つかった縄文土器

日本最古の焼き物は？ という素朴な疑問への答えは、小学校の社会科で習つた通り、表面に縄文様の施された縄文土器だ(とはいへ縄文時代は一万年にも及び、初期のものに縄文は見られない)。縄文土器は、世界最古の上器でもある。

大正十三年、奥琵琶湖、葛籠尾崎の突端の湖底から、湖北町尾上の漁師・喜助さんが引き上げた壺は、縄文土器だつた。その後、弥生土器、土師器、須恵器など百点ほどが見つかつていふ。それらは尾上の公民館に保管されているが、数千年前のままの完全な形を

呈している。

東京大学構内の弥生町から出土したことから名付けられた弥生土器は、縄文土器に比べ調和のとれた形が特徴で、機能性も高まっている。

古墳時代(四〜七世紀)には、弥生土器から展開した土師器がつかられるが、五世紀になると須恵器が登場する。これは朝鮮半島から伝わった技術、すなわちロクロで成形し、窯で焼く方法を使つた焼き物で、大阪府泉北丘陵の陶器を中心として全国に広まり、十六世紀まで続けられた。県内でも、近江町の山津照神社古墳をはじめ、各地で多量に出土している。

七世紀からは、緑釉陶器、灰釉陶器など釉薬を施した陶器が、愛知県の猿投窯を中心につくられる

ようになるが、十一世紀ごろには一時消滅。代わつて、庶民をターゲットにした常滑窯と瀬美窯が盛んになる。そのころ日本各地で地方窯が活動し、そのうち、瀬戸、常滑、備前、丹波、信楽、越前、六古窯という。瀬戸以外は無釉で、庶民向きの日常雑器を生産したが、瀬戸窯では、鎌倉時代(十二〜十四世紀)、再び施釉陶器を焼くようになり、上流階層に用いられた。

室町時代(十四〜十六世紀)になると、それまで日常の道具だった焼き物に、茶の湯の精神が深くかかわつてくる。茶陶として備前や信楽なども用いられるが、十六世紀には美濃焼の黄瀬戸、志野、織部などが出現する。桃山時代の

京では、千利休の好みの茶碗が、長次郎によつて楽焼として焼かれた。利休亡き後、織部が主流になると、信楽では再び日用品、なかでも茶壺を多く生産するようになり、將軍家への新茶の献上に用いられた。さらに、庶民の生活雑貨の需要も広がつていく。現代の信楽焼については「あやしい取材班(40頁)のレポートに任せることにしよう。

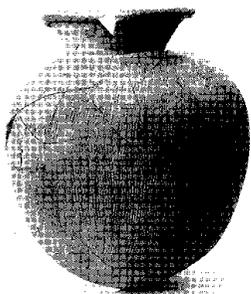
九州では、十六世紀の秀吉による朝鮮半島への出兵後、朝鮮半島の陶工が招聘され、唐津焼に技術を導入したのをはじめ、九州各地に新たな窯を開いたり、発展させた。

近江の焼き物栄枯盛衰

近江を代表する焼き物といえは信楽焼だが、ほかにも多くの窯の栄枯がみられた。

数十年という期間だつたが、彦根城下で焼成された湖東焼は、近江にはめずらしい磁器だつた。彦根藩の援助を受けて花開いたものの、桜田門外の変によつて衰微してしまふ。十数年前、幻の湖東焼を復活させようと彦根市内で窯が開かれた。

彦根の湖東焼の技術を取り入



▲高月町出土文化財センターに保管される須恵器(写真上)／六世紀頃・古保利古墳群出土(写真下)／三〜四世紀初・高月南遺跡

共感 共性 下座

ビューティソシアル
たちばな
15-1 Miyama-cho
Nagahama-city
PHONE 0749-63-4261
0749-63-7388

プライム・ザ
たちばな
9-11 Yawatahigashi-cho
Nagahama-city
PHONE 0749-63-7325

クレールバーン
たちばな
Yawatahigashi-cho
Nagahama-city
PHONE 0749-63-3986

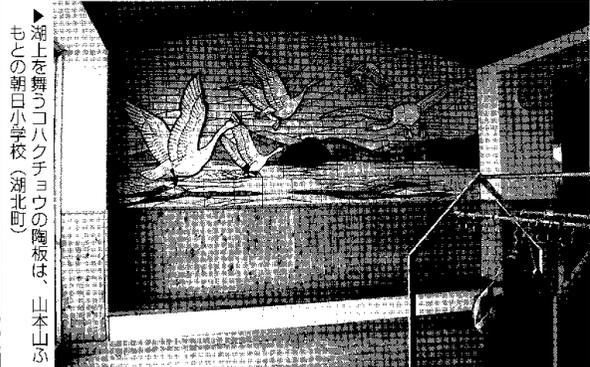
れ、長浜でつくられたのが長浜湖東焼(長浜焼)。江戸末期から明治初期にかけてのわずかな数年間だけの窯だつたが、緻密な南面の作風が独特の世界を築いた。これについては26頁を。

また、名物「餅」を載せるための自家製皿を焼いたことに端を発するといふ草津市の姥が餅焼、比良山麓で焼かれた比良焼、大津市浜大津で、幕末の数年間のみ焼かれた三井御浜焼、清水焼のような趣の石部焼、三上山の麓で焼かれた小富士焼などあつたが、いずれも廃窯となつていふ。

膳所藩の御用窯として十七世紀に生まれた膳所焼は、茶碗だけでなく、茶入れや水差しも多く生産した。茶人として名高い小堀遠州好みの茶道具をつくつた窯を遠州七窯と呼ぶ(これについては「湖



▶米原中学校の昇降口の壁面レリーフの題は、「輝」(かがやく)、「仁」(にん)、「心」(こころ)。朝の光を受けて躍動感がみなぎる。竹尾さんの作品



▶湖上を舞うコハクチョウの陶板は、山本山(ふ)の朝日小学校(湖北町)



▶長浜東中学校の玄関ホール壁の壁画。昭和60年の新築移転に際して、千田敏彦先生が太陽と地球、また生徒と教師の調和やつながりをイメージしてデザインしたもの。四角い板は多量に用いた。濃淡は伊吹山系と湖川を表現している



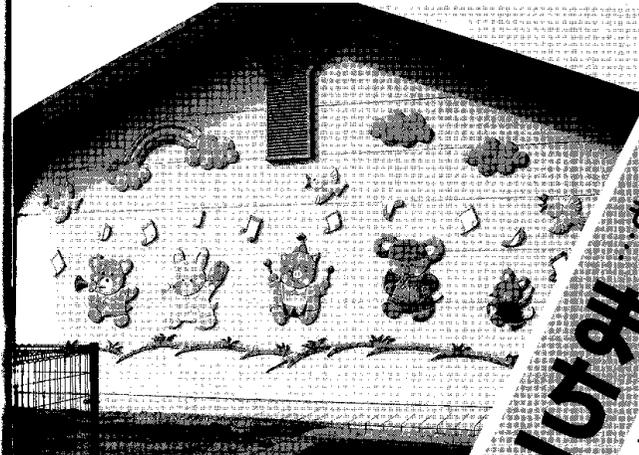
▶茶碗祭では、曳かれる山車の上で人形や陶器がゆらめく(余吾町・十町生)



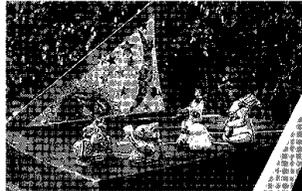
◀米原町番場宿と醸井宿のポケットパークには、中山道の絵図の陶板が旅人をいざなう



◀山唄丸の山蔵前の陶板(長浜市)
▼仲の長い家族の姿は森大道氏の作品(米原町役場)



▲音楽が聞こえてきそうな高月幼稚園の壁画。明るくてやさしい色彩の動物さん

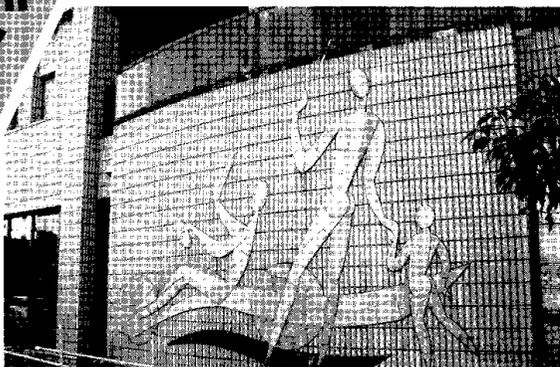


▲長浜市立図書館前庭の日時計の上には、こんなかわい動物たちがいますよ



あかた眼がけた焼き物の世

まちかどや公共施設のなかで見かけた焼き物です。壁面アートも多彩やなあ。よく見かける信楽の狸さん、いろんな恰好をしていて楽しいですね。



浅井文化ホールの玄関。竹尾久之さんの作品▶



▶浅井町文化スポーツ公園の周回路には、まちの歴史を現した壁がはめこまれている



▶車に乗ってお出かけのババを見送るママとボク。の図かな。運転免許センターの外壁(米原町)

古戦場賤ヶ岳のふもと
田園風景の静寂の中の
旅の宿、味の店

日観連・JR協定
料亭 想古亭 煎内
旅館

滋賀県伊香郡木之本町大倉1529-1
TEL: 0749-82-4127(代)
FAX: 0749-82-4888